

# 地質学会関西支部報

Proceedings of Kansai Branch, Geological Society of Japan

No. 124  
1998年12月31日

日本地質学会関西支部

## ◆1997年度活動報告

1. 総会・講演会：1997年7月13日（大阪市立大学理学部） 参加者：47名  
 ○個人講演（11件）  
 ○シンポジウム【いま、地学教育の問題点は何か】（話題提供3件）  
 詳細は、地質学雑誌103巻、936-937ページを参照
2. 例会（1998年3月21日）於神戸大学滝川記念学术交流会館 参加者：40名  
 ○個人講演（8件）  
 ○シンポジウム【兵庫県南部地震のその後】（話題提供・コメント6件）  
 詳細は、日本地質学会News第4号を参照
3. 支部会報出版：No. 122（1997年5月30日）、No. 123（1998年5月30日）
4. 会計：

予 算	(円)	決 算	(円)
[収入]		[収入]	
繰越金	520,836	繰越金	520,836
支部会費	300,000	支部会費	546,930
本部からの補助金	59,600	本部からの補助金	59,900
合計	880,436	雑収入	12,30
		合計	1,128,896
[支出]	(円)	[支出]	(円)
通信費	250,000	通信費	109,130
支部報印刷費	300,000	支部報印刷費	72,450
事務費	30,000	事務費	15,000
行事費	150,000	行事費	64,000
予備費	150,436	繰越金	868,316
合計	880,436	合計	1,128,896

5. 会員動向：294名（7月1日現在）

## ◆1998年度活動予定

1. 総会・講演会・シンポジウム（1998年7月4日）於 京都大学総合博物館
2. 関西支部例会（1999年3月予定）
3. 講習会【阪神地域の地盤、地震、液状化】（10月7日）関西地盤情報活用協議会主催に協賛
4. 関西支部・西日本支部合同例会（11月21日/22日）於 愛媛大学
5. 支部会報出版：No. 124（1998年12月28日）、No.125（西日本支部報113号との合併号1999年1月22日）

6. 関西支部役員：

支部長：井本伸広（京都教育大）

幹事：京都部会—大野照文・神谷英利（京大）・田中里志（京都教育大）；阪神部会—宮田隆夫（神戸大）；北陸部会—竹内 章（富山大）；山陰部会—高須晃（島根大学）；四国部会—榊原正幸（愛媛大学）

7. 予算：

	[収入]	(円)		[支出]	(円)
	繰越金	868,316		通信費	250,000
	支部会費	300,000		支部報印刷費	300,000
	本部からの補助金	59,900		事務費	30,000
	合計	1,228,216		行事費	200,000
				予備費	448,216
				合計	1,228,216

日本地質学会関西支部1998年度総会・講演会・シンポジウム（1998年7月4日）

於京都大学 総合博物館

個人講演

1. 「京都西山山地の中・古生界一層序と構造について」 . . . . . 楠利夫・武蔵野実・井本伸広・丹波地帯研究グループ
2. 「三重県西部の秩父帯からのジュラ紀放散虫化石」 . . . . . 柏木健司
3. 「紀伊山地中央部の秩父帯・四万十帯（その15）—辻堂地域（II）—」 . . . . . 岩橋豊彦・大和大峯研究グループ
4. 「黒瀬川帯のシルル～デボン系祇園山層群からの放散虫化石」 . . . . . 梅田真樹
5. 「P/T境界を通じての放散虫群集の変遷（その5）—パンサラッサ・揚子地塊・パレオテーチス間の比較—」 . . . . . 八尾昭・桑原希世子
6. 「世界の中の伊能図・日本の中での伊能図」 . . . . . 清水大吉郎

地学教育問題シンポジウム【いま、地学教育の問題点は何か】（第2回）

日本応用地質学会関西支部との共催

世話人：三田村宗樹，大野照文，小林文夫

1. 「大阪市立自然史博物館での普及教育活動」 . . . . . 塚腰実
2. 「役に立つ地学のアピールをめざして—人と自然の博物館の各種セミナー・企画展を通して—」 . . . . . 小林文夫
3. 「国家戦略としての大学博物館」 . . . . . 大野照文
4. 「総合討論」

以下、上記のシンポジウム・講演会の講演要旨を収録する。

講演要旨

個人講演

京都西山地域の中・古生界—層序と構造について—

楠 利夫 (同志社中学校)・武蔵野 実 (京都教育大学)・  
井本 伸広 (京都教育大学)・丹波地帯研究グループ

Paleozoic-Mesozoic Formation of the Western Hills of Kyoto  
— On the Stratigraphy and Structure —

Toshio KUSUNOKI (Doshisha J.H.S.), Minoru MUSASHINO  
Nobuhiro IMOTO (Kyoto Univ. Educ.) and Tamba Belt Research Group

本地域の中・古生界は、基質である頁岩層からの化石の産出がまれなため、チャート、緑色岩、石灰岩、砂岩などの岩相によって様々に区分され混乱していた(図)。数年来、丹波地帯研究グループは本地域の北部を中心に、本地域南部および西部を調査してきた。その結果、本地域南部の頁岩、珪質頁岩、酸性凝灰岩、チャートなどから年代決定に有効な放射虫化石を得、年代と層序構造が以下のように明らかになった。

本地域の中・古生界は、全体に南上位で構造的な下位より、年谷川層、田能層、出灰層、高槻層、山下層が南西部に向かって分布する。

出灰層はトリアス紀新世の付加体で、見かけ下位よりTIIIdユニット相当層、ポンポン山砂岩部層(整然層)、本山寺部層に区分される。

このうちTIIIdユニット相当層は、黒色頁岩層から*Capnochosphaera* sp., 珪質頁岩層から*Triassocampe deweveri*, チャートから*Parentactinia nakatsugawaensis*, 緑色岩に伴う凝灰質な珪質頁岩からは*Triassocampe deweveri*, そのほかにチャートからペルム紀の放射虫化石が産出している。本部層の年

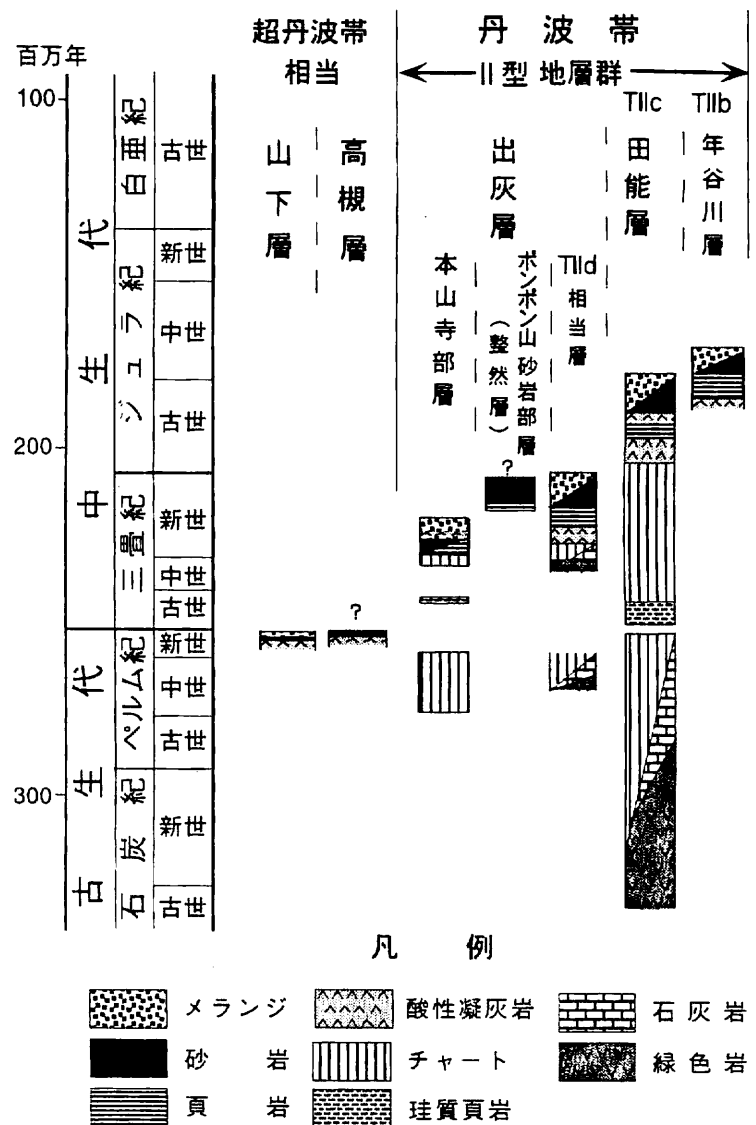


図1 丹波帯南西部, 西山地域の層序総括図

### 京都西山地域の中・古生界地質体およびユニット対応表

Sakaguchi (1957,1974)		安養寺ほか (1987)		楠・武蔵野 <sup>①</sup> (1990,1991,1992)		丹波地帯研究グループ (1993, 1995)		Nakae (1993)		本 論	
丹 波 地 帯	山下層			山下層					山下層	ベルム紀新世	超丹波帯
	高槻層	超丹波帯	b層	超丹波帯	高槻層	高槻層	高槻層	高槻層	高槻層	本山寺部層	丹波帯 II型地層群
			a層		浄土谷層	浄土谷 メランジ 浄土谷 砂岩層	浄土谷 コンプレックス				
	出灰層				本山寺層	本山寺層	出灰 コンプレックス	出灰層 <sup>②</sup>	トリアス紀新世	ボンボン山 砂岩部層 (整然層)	
				ボンボン山層	ボンボン山層	田能 コンプレックス	田能 コンプレックス	TII d ユニット	TII d ユニット		
				TII dユニット	TII dユニット トリアス紀新世	TII cユニット ジュラ紀古世	老ノ坂 コンプレックス	年谷川層 ジュラ紀中世前期	TII b ユニット		
田能層	①: 砂岩層のみについての議論。 ②: 楠・武蔵野(1990,1991,1992)の TII dタイプ、氷上層タイプの砂岩 ブロックをメランジ 中に含んでいる。										
年谷川層											

代はトリアス紀新世で、中沢（1994）が報告したトリアス紀二枚貝化石（*Misidierlla?* n.sp.）の転石は、本層に由来すると考えられる。

ボンボン山砂岩部層は、基質の少ない砂岩を主とする整然層で、トリアス紀新世のTII dユニット相当層と本山寺部層に挟まれて分布している。現在のところ化石は産出しないが、構造的位相から見てトリアス紀新世の可能性はある。

本山寺部層（武蔵野・丹波地帯研究グループ，1993：新称）は、上部にメランジが発達し高槻層とは衝上断層で境される。このメランジには、超丹波帯氷上層に相当する緑灰色圧砕砂岩をブロックとして含んでいる。本山寺部層の頁岩層からは、トリアス紀新世の *Triassocampe nova* 群集に相当する放射虫化石が報告されている（楠，1994）。

講演ではこれらのデータに砂岩組成の検討を加え、丹波帯南西部におけるトリアス紀新世の付加テクトニクスについて考察した。

## 三重県西部の秩父帯からのジュラ紀放射虫化石

柏木 健司 (大阪市立大学理学部地球学教室)

## Jurassic Radiolarians from the Chichibu Terrane in the Western Mie Prefecture.

Kenji KASHIWAGI (Faculty of Geosciences, Osaka City Univ.)

最近、加藤・坂(1997)は三重県西部の秩父累帯を、その岩相と地質構造にもとづいて、秩父北帯・秩父中帯・秩父南帯に区分している。また、秩父中帯にジュラ紀付加体とは異質な地質体を識別し、その分布域を黒瀬川地帯と呼んでいる。今回、上記の地帯区分および黒瀬川地帯の存在を検討する目的で、三重県大内山村犬戻峡周辺において野外調査を行い、地質図を作成するとともに、多くの地点から放射虫化石を得た。

調査範囲は、南北約2km、東西約2.5kmで、加藤・坂(1997)の秩父北帯・秩父中帯および秩父南帯にまたがる地域である。調査地域には、チャート・珪質泥岩および陸源性碎屑岩がおもに分布し、砥石型珪質粘土岩がチャートに伴われて産出する。それぞれの岩相分布や個々の層理面や断層面の走向傾斜値から判断して、各岩相はほぼ東西走向で北に低～中角度に傾斜する断層で接していると判断される。

放射虫化石は、チャート・珪質泥岩・陸源性碎屑岩中の泥岩よりそれぞれ得られた。チャートからは、三畳紀中世Anician, ジュラ紀古世前期～中期の放射虫化石が産出する。珪質泥岩からは一般に保存良好な放射虫化石が多産し、*Tricolocapsa plicarum* 帯、*Tricolocapsa conexa* 帯下部、*T. conexa* 帯上部、*T. conexa* 帯～*Stylocapsa (?) spiralis* 帯に特徴的な種を含む(以下、化石帯はMatsuoka, 1995に基づく)。珪質泥岩の放射虫化石年代は*T. plicarum* 帯～*T. conexa* 帯のジュラ紀中世Bajocian～Callovian中期で、*S. (?) spiralis* 帯のジュラ紀新世Oxfordianまで伸びる可能性がある。陸源性碎屑岩は一般に放射虫化石の産出に乏しく、その保存状態も不良であり、*T. conexa* 帯上部～*S. (?) spiralis* 帯下部、*T. conexa* 帯～*S. (?) spiralis* 帯に特徴的な種を含む。陸源性碎屑岩の放射虫化石年代はジュラ紀中世Callovianで、ジュラ紀中世Bathonian中期～新世Oxfordianの可能性もある。岩相とそれぞれの放射虫化石年代から、調査地域にはジュラ紀付加体が広く分布する。また、チャートから珪質泥岩、陸源性碎屑岩へと、放射虫化石年代は若くなる傾向にある。

加藤・坂(1997)は、本調査地域の秩父累帯を3つの地帯に区分している。しかし今回、調査地域を複数の地帯に区分する証拠は得られず、得られた岩相分布と加藤・坂(1997)の地帯区分の境界は明瞭に斜交する。調査地域では、チャート・珪質泥岩・陸源性碎屑岩が北傾斜の断層で繰り返し、チャートから珪質泥岩、陸源性碎屑岩へとその年代が若くなる。これは、チャート-碎屑岩シーケンスの特徴に一致する。加藤・坂(1997)の示す黒瀬川地帯の分布域は、今回得られたチャートの分布域に明瞭に斜交する。また、黒瀬川地帯の存在を示す証拠は全く得られなかった。三重県大内山村犬戻峡周辺は、チャート-碎屑岩シーケンスで特徴づけられるジュラ紀付加体の秩父帯のみから構成され、黒瀬川地帯は存在しないものと判断される。

## 紀伊山地中央部の秩父帯・四万十帯（その15）－辻堂地域(II)－

岩橋 豊彦（大阪府立泉大津高校）・大和大峯研究グループ

The Chichibu and Shimanto Terranes in the Central Area of the Kii Mountains,  
Southwest Japan(Part15)－Mesozoic of the Tujido District in Nara Prefecture－  
IWAHASHI Toyohiko(Izumiotzu Senior High School) and Yamato Omine Reserch Group

本報告は竹内・大和大峯研究グループ（1997年度関西支部にて講演）の発表後、追調査・再検討してまとめた大和大峯研究グループ（1998）の内容も含む。調査地域は下多古川断層（東北東－西南西方向）と北角断層（ほぼ南北方向）で、北部、東部、西部に分けられる。主要部にあたる西部では、構造的に上位に伯母谷川層、中位に赤滝層、下位に宇井層が分布し、いずれも四万十帯に属する。

伯母谷川層は、砂岩優勢の砂岩泥岩互層を主とする整然層で、上限は秩父帯の高原層および山葵谷層と、下限は赤滝層とスラストで境される。本地域では化石を産出してないが、本層の東方延長部の大迫地域から、Albian～Cenomanianの放散虫が産出している。また、大迫地域では秩父帯の地層から由来したと考えられる種々の岩質のオリストリスを含み、その岩相的特徴から大陸斜面付近の堆積物と考えられる。本層は岩相的・地質年代的類似性から湯川層（紀州四万十団体研究グループ、1991）の一部に対比される。

赤滝層の見かけ下部はメランジュ、見かけ上部は砂岩泥岩層が卓越する。上限は伯母谷川層と、下限は宇井層とスラストで境され、見かけの厚さは750m+である。本層には緑色岩類、チャート、赤色泥岩などの海洋プレート層序の中・下部を構成する地質体起源の岩体がメランジュに含まれる。産出する放散虫化石からみた各岩体の年代はジュラ紀新世～Cenomanianにわたり、基質をなす泥質岩の年代はTuronian～Campanianとなっている。赤滝層は産出化石の年代や岩相的類似性から花園層（栗本、1982）の一部に対比されると考えられる。

宇井層は砂岩優勢の砂岩泥岩互層を主とするが、見かけ上部では泥質岩主体のメランジュが多くなる。見かけの厚さは750m+で、下限は不明である。上位の赤滝層との境であるスラストに近づくほど、基質の泥質岩が剪断を受けている。メランジュ中には、チャート、酸性凝灰岩、緑色岩類、赤色泥岩、リボン状チャートを含む石灰岩のレンズ状・ブロック状岩体が含まれる。産出する放散虫化石からみて、宇井層の碎屑性堆積層は Cenomanian～Turonian（一部Coniacian）に堆積した。本層はTuronian～Santonianに付加体となる過程でメランジュ化した地質体と考えられる。宇井層の砂岩優勢な碎屑性堆積層は伯母谷川層に対比されるが、砂岩優勢の整然層主体の湯川層とは、メランジュを含む点で層相的に異なる。一方、層相や産出化石から、その南に分布するTuronian～Campanianとされている美山層（紀州四万十団体研究グループ、1991）に対比される可能性もあるが、宇井層主体はCenomanianなので、美山層よりも古いことになる。

付加体では、構造的上位から下位に向かって年代が若くなるという極性が一般的特徴であるが、本地域では逆の極性を示し、構造的上位に新しい年代の付加体である赤滝層がある。このような年代関係の解釈として、赤滝層と宇井層間のスラストは付加体形成時の初生的なものではなく、後生的に形成されたOST（out-of-sequence thrust）である可能性が高いものと考えられる。同様に、伯母谷川層とその下位にある赤滝層の構造関係もOSTである可能性が高い。その理由は、赤滝層が付加体として形成されたとき、その構造的上位に宇井層が重なっていたはずだが、現在は赤滝層の構造的上位に伯母谷川層が、さらにその上に秩父帯の各層が重なっているからである。

以上の構造関係に基づいて、地質構造の形成過程を考察すると、

- ①Albian～Cenomanianにかけて、秩父帯の衝上とその前縁部での崩壊によるオリストリスの供給を受けて、伯母谷川層が大陸斜面上で形成された。ほぼ同時期か少し遅れて、宇井層の碎屑岩層の主体が海溝軸部の大陸よりの場所で堆積し、海溝軸部のさらに外側の大洋底で赤滝層の赤色泥岩が堆積し始めた。
- ②Turonianの頃、海洋プレートの沈み込みに伴って、宇井層が付加体として形成され始め、赤滝層の碎屑岩層が海溝軸部で堆積し始めた。
- ③Coniacian～Santonianにかけて、赤滝層が付加体として形成され始めた。
- ④付加地帯後方の陸側の上昇が起こり、赤滝層がOSTによって宇井層の上に重なる構造ができた。
- ⑤伯母谷川層がOSTによって赤滝層の上に重なった。
- ⑥北東－南西方向の軸を持つアンチフォームやシンフォームが形成された後、中新世中期に火砕岩岩脈と北角断層が形成され、西部が東部よりも上昇した。中新世中期以降に、下多古川断層が形成された。この過程で、伯母谷層とその上位の地層が浸食削剥されて欠如したと考えられる。

P/T境界を通じての放散虫群集の変遷（その5）—パンサラッサ・揚子地塊・パレオテチス間の比較—

八尾 昭・桑原 希世子（大阪市立大学理学部地球学教室）

Radiolarian Faunal Change across the Permian / Triassic Boundary [Part 5]  
—Faunal Comparison to the Panthalassa, the Yangzi Massif and the Paleotethys—  
Akira YAO and Kiyoko KUWAHARA (Dept. Geosci., Fac. Sci., Osaka City Univ.)

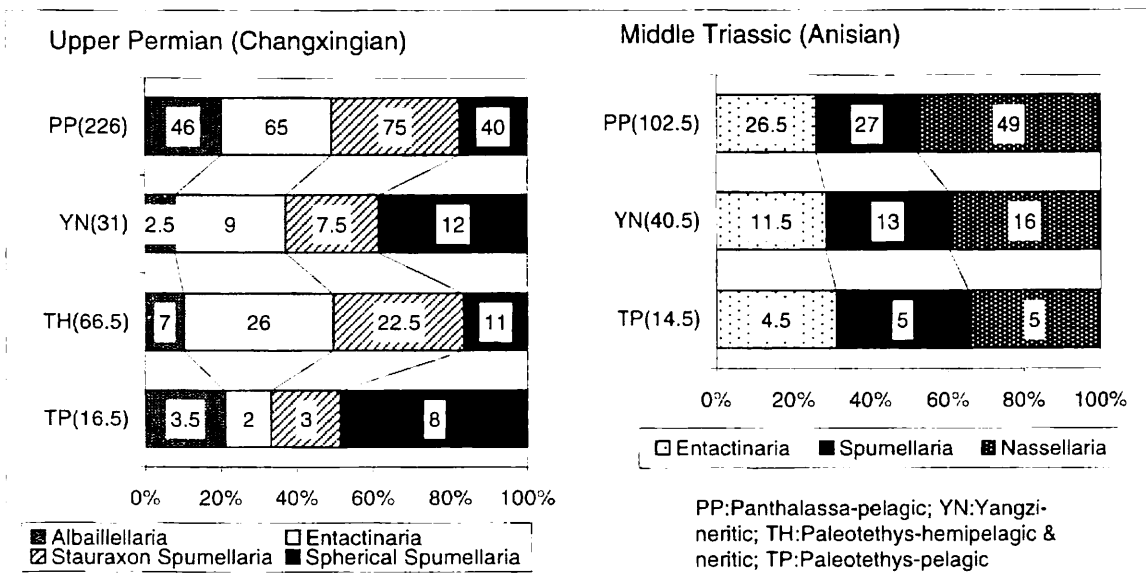
ペルム紀／三畳紀境界（P/T境界）で地球史上最大の生物大量絶滅事件が生じた。放散虫類もこの時期に大きく群集が入れ替わったことが明らかになりつつあり、この一連の講演[その1]～[その4]でその実態を報告しつつある。これらの研究から放散虫化石群集の解析が、当時の海洋環境変動を復元するのに有効であることが判明してきた。本講演では西南日本と中国のペルム紀新世—三畳紀中世の放散虫化石群集の解析結果を報告し、その古地理学的意義について考察する。

検討したセクション、岩相及びその地質学的位置付けは以下の通りである。

- A. 西南日本：美濃帯郡上八幡地域の(1)郡上八幡セクション（上部ペルム系）及び(2)犬山地域の桃太郎神社セクションほか（下—中部三畳系）の層状チャート、パンサラッサ域の低緯度・深海堆積物。
- B. 中国貴州省：紫雲Ziyun地域の(1)晒瓦Shaiwaセクション（上部ペルム系）及び(2)猴場Houchangセクション（中部三畳系）の石灰岩・泥質岩・珪質岩、揚子地塊上の浅海成堆積物。
- C. 中国雲南省：昌寧—孟連帯の付加体構成岩としての層状チャートおよび酸性凝灰岩岩体、パレオテチス域の低緯度域の堆積物。

全セクションを通じて、ペルム紀新世後期(Changxingian)の放散虫化石群集として*Neobaiella ornithiformis*群集および*N. optima*群集を、三畳紀中世前期(Anisian)の群集として*Hozumadia gifuensis*群集および*Triassocampe coronata*群集を扱い、それぞれの試料に含まれる全構成種を検討した。

A(1)のChangxingianでは一層準につき100種前後が識別され、ペルム紀新世後期を通じて200数十種が存在する。A(2)のAnisianでも一層準につき約100種が識別される。B(1)(2)では、Changxingian, Anisianの両時代の群集とも構成種数は数十種である。Cの放散虫群集解析はAやBと比較できる程度には進んでいないが、大略的にはAの群集と比較的類似する。



パンサラッサ域(A)・揚子地塊(B)・パレオテチス域(C)の三者間で、ChangxingianとAnisianの群集について、放散虫類の分類群ごとに含まれる種数を比較したものを図に示す。Changxingianでは、パンサラッサ域とパレオテチス域でAlbaillellariaの占める割合が揚子地塊よりも多い。また、揚子地塊上ではspherical Spumellariaに属する種の割合が多い。Anisianでは、パンサラッサ域にNassellariaに属する種が多く、揚子地塊上ではSpumellariaの割合が多いことが判明した。また、パンサラッサ域では全体的に種数が多い。さらに、パンサラッサ域と揚子地塊上で共通種が存在する一方、揚子地塊上に固有の種も多く認められる。今回の検討から、古地理の位置づけに対応した、ペルム紀から三畳紀にかけての放散虫群集の違いが存在することが明確になった。



ドイツクラッツ社製教育用大型スライド。橋杭岩も風化地形の典型として収録されている。(京都大学総合博物館所蔵)



## シンポジウム【いま、地学教育の問題点は何か】（第2回）

日本応用地質学会関西支部との共催

### 大阪市立自然史博物館での普及教育活動

塚腰 実（大阪市立自然史博物館）

大阪市立自然史博物館は生涯学習施設として、調査研究事業、資料収集事業をもとに展覧事業、普及教育事業の多彩な普及教育活動を活発に行っている。博物館には地史、第四紀、動物、植物、昆虫の5つの研究室があり、14人の学芸員が所属し、地学系の学芸員は地史、第四紀研究室に各3人、6名が所属している。

展覧事業として、常設展、特別展、特別陳列、館外展示が行われている。常設展は、「大阪の自然」、「地球と生命の歴史」、「生物の進化」、「自然のめぐみ」の4つの展示室からなる。「地球と生命の歴史」の展示室においては、大阪平野のおいたち、日本列島のおいたち、そこに現れた生物の移り変わりについて多数の化石標本をもとに展示している。また、博物館がある長居植物園には第三紀植物群とよばれる古代の森があり、博物館の化石展示と関連して、日本から消滅した植物のいくつかを見ることができる。特別展は年1回、夏休みを中心として約2カ月開催している。最近開催した地学系の特別展には、1993年「5億年の歴史（日本地質学会関西支部と共催）」、1994年「琵琶湖-おいたちと生物」、1995年「ゾウのきた道」、1996年「昆虫の化石」が行われた。特別陳列は春と年によっては秋にも開催され、新たな博物館資料を紹介する新収資料展やテーマ展示が行われている。最近の地学系のテーマ展示として1991年「落ち葉の化石」、1992年「ナウマンゾウハンターの世界」、1993年「植物化石展-メタセコイアと三木茂コレクション」、1996年「1995年兵庫県南部地震の被害（大阪市立大学阪神学術調査団と共催）」が行われた。

普及教育事業として、野外観察会、室内実習、植物園案内、自然史講座、科学映画会、講演会、標本同定会、展示解説書・ミニガイドの出版が行われている。平成8年度は、行事の回数が146回にもおよび、参加者総数は7940名になった。

野外観察会には、やさしい自然観察会（野外観察会の中では入門編で、自然に親しむ糸口をつかんでもらう観察会）、地域自然誌シリーズ（その地域の自然を様々な分野の観点から観察し、自然の特徴とそこを利用する人との関わりについて総合的に考える観察会）、テーマ別自然観察会（テーマと対象をしばって観察し、自然に対する理解をより深めようとする観察会）がある。地学系のやさしい自然観察会として実施している「化石さがし」は、300名以上の応募があった年もある。また、地学系のテーマ別自然観察会として、第一瀬戸内海の地層、200万年前の河原、ビルの石材などを実施している。

講演会は博物館独自で行う講演会の他に、地学団体研究会大阪支部、京都大学防災研究所と共催で講演会を実施している。地学団体研究会と共催の地球科学講演会は1998年で14回目となり、最近では毎回200名以上の参加者がある。その中には、連続して参加している市民も多い。地球科学講演会のアンケートの「今後聞きたい講演内容」の項目には、環境問題、宇宙、古生物、地質、地震分野の様々な項目があり、地学分野への関心の高さがうかがえる。

また、博物館とは独立した組織として運営されている「自然史博物館友の会」は、会報の発行、ハイキングなどの行事、オリジナルグッズの製作などを行っており、約1900家族の会員が所属している。会員は友の会行事ばかりでなく、博物館の行事にも積極的に参加している。

このように自然史博物館では、地学系の行事を含めた多くの普及教育活動を行っている。これまでも実施しているが、さらに学会や大学などと共催で、展覧会や講演会が実施できれば、普及教育活動の分野を広げることが可能である。

## 国家戦略としての大学博物館

大野 照文 (京都大学総合博物館・情報発信系)

University Museum as a Part of Nation's Strategy.  
Terufumi OHNO(The Kyoto University Museum)

京都大学が収蔵する250万点に及ぶ自然史・文化史・技術史標本資料を「ユニバーシティ・ミュージアム」のコンセプトに基づいて活用するため、基礎資料調査系、資料開発系、情報発信系という3つの系を配した京都大学総合博物館が平成9年4月1日発足した。教官9名事務官4名の陣容である。少ないスタッフ数に対して、ユニバーシティ・ミュージアムの目指す目標は高く、また多岐にわたる。とりわけ、大学にある博物館として、1) 博物学の次世代をになう優秀な人材のリクルート、2) 膨大な数の標本を適正に収蔵・管理して研究・教育への利用を促進すること、3) 大学の存在意義を一般市民に理解していただくことの3点は最も重要な課題である。少人数のスタッフでこのような課題をどのように実現してゆくのか、筆者なりに考えたことを以下に述べる。

大学には、大きな未活用的資源がある。それは、退官教官である。研究・教育の経験豊富な彼らに、週に1回でも良いからボランティアをお願いしたい。そして、総合博物館の展示場で、あるいは公開講座や公開教室で、小中学生・高校生に科学することについて直接に語ってもらいたい。幸い京都には年間100万人もの修学旅行生が訪れる。仮に、このうちの何%かが博物館を訪れてくれ、退官教官や館の専任教官から直接語りかけられれば、科学することが如何に面白いことであるかがわかるだろう。そうすれば、口コミで、京都大学総合博物館の評判が全国に伝わり、年を追ってますます多くの小・中・高校生が博物館を訪れる。その結果、科学の真の面白さに惹かれて大学へ進学する学生の率が現在よりも急増するに違いない。第一の課題はこうして解決できる。

このようにして入学した学生は、大学博物館の活動の意味を理解し、標本の収蔵・管理から展示の企画、解説まで幅広く博物館活動に協力してくれるであろう。さらに、学生、退官教官、博物館スタッフが一緒になって総合博物館を訪れる社会人や、熟年層の観覧者のきめ細かいケアを行うことによってリピーターが多く生まれ、やがてその中から博物館のお手伝いをいただける人たちが生まれてくるだろう。こうして、学生・退官教官・現任教官に社会人や熟年者が加わってボランティアの輪が広がり、第二の課題である標本の管理に関わる問題も解決へ向かうだろう。さらに、このようなボランティアの増加すること自体が、第三の課題、つまり大学(少なくとも大学博物館)の存在意義が社会に理解されたことを意味する。

さて、博物館の上記のような活動を通じて、自然の面白さや自然愛護の精神、生命の尊厳を理解した情操豊かな児童・生徒がたくさん育つであろう。また、科学する面白さを味わった子供達が目的意識をもって大学へ入学すれば、自ずと熱心に勉学に励む学生の比率が増加するだろう。そうすれば、教官は、偏差値による選別の結果、なにを学びたいのかも明確でないまま入学してくる学生に対して「やる気」を芽生えさせるカウンセラー的業務から開放される。そして、学生は勉学を、教官は真の研究・教育をする時間が増え、大学のレベルは上昇するであろう。

また、まじめに勉学した学生の多くは社会人となって勤勉に働き、多額の税金を納めてくれるだろう、(その一部は我々の研究・教育活動のための貴重な財源となる)。一方、ボランティアに参加して生き甲斐をもった熟年者は、精神的にも肉体的にもより健康な生活を送るに違いない。そうすれば、莫大な額に膨れ上がった熟年者の医療費も幾ばくかは節約できるだろう。こうして節約された財源を、政府はより有意義な施策に投入できるようになる。大学博物館は、こうして人の心を豊かにしながら国の財政状況の改善をもたらす可能性をすら秘めているのである。そのような意味を込めて私は、大学博物館の経営は、国家戦略であると考え、全国の大学博物館の先鞭を切ってこのような構想の実現に最善をつくすつもりである。

日本地質学会関西支部規約

- 第1条 本支部は「日本地質学会関西支部」と称します。
- 第2条 本支部は地学の進歩発展及び普及と会員相互の親睦とを図ることを目的とします。
- 第3条 本支部は北陸3県、近畿2府5県、山陰2県、四国4県に在住する日本地質学会々員及び地学に関係し特に入会を希望するものを会員とします。
- 第4条 本支部に次の部会を置きます。  
北陸部会（富山県、石川県、福井県）  
京都部会（滋賀県、京都府、三重県、奈良県）  
阪神部会（大阪府、和歌山県、兵庫県）  
山陰部会（島根県、鳥取県）  
四国部会（香川県、愛媛県、徳島県、高知県）
- 第5条 本支部の運営は京都・阪神部会が二年毎に行う。
- 第6条 本支部は第2条の目的を達成するために次の事業を行います。  
講演会（例会）、講習会、見学旅行、懇親会、支部報の発行、その他目的達成のため必要と認められる事項
- 第7条 本支部運営の基本方針を決定するため、年1回総会を開きます。
- 第8条 本支部運営の執行機関として次の役員を置きます。  
支部長 幹事 7名
- 支部長及び幹事の任期は1年とします。但し重任は差し支ありません。
- 第9条 支部長は支部会員が互選し、又幹事は各支部毎に選挙或は推薦し、総会に於て承認を受けるものとします。  
幹事は運営担当部会 3名 他は各1名とします。
- 第10条 支部長及び幹事は「幹事会」を組織し、総会の決議に基づき業務執行の方針を決定します。
- 第11条 支部長は本支部を代表し日本地質学会との連絡に当たります。  
支部長事故あるときは支部長の指名する幹事1名がこれに当たります。
- 第12条 幹事は本支部一切の業務を執行します。
- 第13条 本支部会員は会費として年額1500円を、納入するものとします。  
正当の理由なく1ヶ年以上会費を滞納した会員は幹事会の審議を経、支部長承認の下に行事の通知状、支部報などの配布を停止することができます。
- 第14条 本支部に会計監査（1名）をおきます。
- 第15条 本支部規約は総会に於て出席者の過半数の賛成を得て改訂及び附加することができます。
- 附 則 本規約は、1991年7月7日より施行します。

日本地質学会関西支部報, No. 124

1998年12月28日発行

発行 日本地質学会関西支部

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学大学院理学研究科地質学鉱物学教室

電話075-753-4166 ファクス075-753-4189